

2003年11月12日

一橋大学大学院経済学研究科博士学位請求論文審査報告

小川浩氏の博士学位請求論文『高齢者雇用と少子化の関係について』は次の3部、8章から構成されている。

- 第1章 はじめに
- 第 部 高齢者就業
  - 第2章 年金が高齢者の就業行動に与える影響について
  - 第3章 高年齢者の再就業・引退行動と前職の関係について
  - 第4章 高齢者の健康状態と就業
- 第 部 少結婚化
  - 第5章 結婚の経済学再考
  - 第6章 乗り換えモデルによる初婚行動のシミュレーション
  - 第7章 賃金・雇用制度と初婚行動
- 第 部 少結婚対策と高齢者雇用の関係整理
  - 第8章 賃金プロファイルのフラット化

この学位請求論文は、現在わが国で進行しつつある少子化の主因の一つである晩婚化・非婚化（論文での表現を用いれば少結婚化）および高齢化に伴う高齢者雇用問題に共通するファクターとして、賃金の年齢プロファイルを取り上げ、賃金プロファイルをフラット化することによって少結婚化と高齢者雇用問題の両方が改善可能であることを示そうとしている。これまで高齢者雇用問題は主として補助金あるいは規制による対策が行われてきていること、および少子化対策として子育て支援策の強化が求められていることを勘案すると、上記のような小川氏の主張はユニークかつ独自性の強いものである。

本論文では、第 部の第2章から第4章にかけてマイクロデータ（高年齢者就業実態調査・就業構造基本調査・国民生活基礎調査）を駆使し、高齢者雇用への補助金効果、離職・再就職のタイミングが職種選択に与える影響、さらに加齢による身体状態の変化について、それぞれ分析している。そして高齢者雇用における補助金の効果があまり大きくないこと、したがって補助金による雇用維持が困難であること、60歳定年制が人的資本の活用という観点から望ましくないこと等を示している。これらの結論は第8章で選択的引退制度が望

ましいと主張するさいに利用されている。

第 部第 5 章では、国民生活基礎調査のマイクロデータを利用し、未婚男女の関係から結婚を説明する G. Becker の結婚モデルがわが国の実態に合わないことを示す一方、それに代わるモデルとして、娘と同居している親と夫候補の男性の関係から女性の初婚行動を説明する「乗り換えモデル」を提案している。このモデルでは賃金の年齢プロファイルが初婚行動に大きな影響を持つ。そこで第 6 章において小川氏は「乗り換えモデル」を実装したマイクロシミュレーションを試み、時系列的に観察された初婚行動の変化が賃金プロファイルの異時点間変化で説明することができることを示そうとしている。そして第 7 章では、賃金プロファイルや雇用制度を変化させた場合の将来推計をマイクロシミュレーションを用いて行い、賃金プロファイルのフラット化が少結婚化対策となりうると主張している。

第 部では、高齢者の就業率を引き上げる方策としては第 部での分析から補助金に頼るよりも選択的引退制度の方が望ましいと主張し、選択的引退制度を実現させるためには賃金プロファイルのフラット化が必要であるとしている。さらに第 部におけるシミュレーション結果を踏まえて、賃金プロファイルのフラット化が少結婚化対策として有効であると主張している。

以下では、各章ごとにその内容を概観し、小川氏の論文に対する評価を与えることにしたい。

第 2 章「年金が高齢者の就業行動に与える影響について」では、高年齢者就業実態調査の個票を再集計することによって高齢者の就業を規定する要素について分析している。高年齢者就業実態調査の個票再集計は多くの研究者によって既に行われているが、既存の研究と小川氏の研究は次の 2 つの点で異なっている。すなわち第 1 に、厚生年金の在職減額制度と仕事からの収入データを用いて減額前の年金額（論文中の用語では「本来年金」）を推計することにより、既存の研究で問題となっていた年金額と就業の同時決定性について一つの解決を与えたこと。第 2 に、原データに含まれる不完全な家族に関する情報から世帯の構造を推計し、世帯の構造が高年齢男性の就業行動に与える影響が無視できないほど大きいことを示したこと。

特に「本来年金」概念の提案は年金に関するその後の分析で広く用いられるきっかけとなっており、氏の大きな貢献であると言える。

第 3 章「高年齢者の再就業・引退行動と前職の関係について」では、就業構造基本調査の個票を再集計することによって 60 歳代前半層の就業が前職の離職時期・離職理由に大きく左右されることを明らかにしている。そして前職および現在の職業に関して細かい情報が得られる就業構造基本調査の特徴を活かし、

離職時期が遅くなれば遅くなるほど再就職後の職種は前職と違うものになりがちであることが示されている。定年年齢が60歳になることによって再就職が逆に難しくなることを示唆した先行研究をさらに深化させ、職種選択まで含めて推計をしたことが本論文における氏の貢献と言える。ただ、職種選択において雇い人なしの自営業者を非正規就業者と同じカテゴリーに含めて分析するなど、細部においては若干問題が残されている。

第4章「高齢者の健康状態と就業」では、国民生活基礎調査を用いて、加齢に伴い人々の健康状態がどのように悪化し、就業可能性がどの程度低下していくかを調べている。そして65歳を超えると健康状態には大きなばらつきが生じることを明らかにしている。ただ、この結論は第8章で利用されているものの、手法・内容ともに特段新しいとは言えない。

第5章「結婚の経済学再考」では、国民生活基礎調査の再集計結果を用いて、わが国における女性の初婚行動を説明するモデルを構築している。氏の主張のポイントは、わが国においては未婚女性の9割近い人が親と同居しており、従来、結婚の経済学で一般的に受けいれられてきたG. Beckerの結婚モデルが不適切であるということにある。この点について、氏は時系列・クロスセクション・地域別と様々なデータを用いて、いずれのケースでもBeckerのモデルから予想されるような行動が観察できないとし、親と同居している未婚者の初婚行動を説明するための「乗り換えモデル」を提案している。このモデルは、いわゆるパラサイトシングル仮説に近いものであるが、所得の変動だけで説明しようとしている点でそれとは異なる。

乗り換えモデルはわが国の女性の初婚行動を説明するものとして新しく、魅力的である。ただ、父親と娘の学歴や所得に強い相関がある場合を仮定すると、Beckerモデルと乗り換えモデルの違いを識別できないおそれもあるなど荒削りの点もある。しかし、新しいモデルを提示することによって、わが国における女性の初婚行動に関する新たな知見をもたらした。最先端の研究テーマに日本的イノベーションをもたらし、今後の研究に対して一つの有効な土台を提供したという意味で高く評価することができる。

第6章「乗り換えモデルによる初婚行動のシミュレーション」では前章で自ら提起したモデルを用いてマイクロシミュレーションを試み、わが国における女性の初婚行動の時間的変化がどの程度まで賃金プロファイルの変化によるものであるかを調べている。マッチングの過程に関するセットアップ、あるいは「焦り」の便宜的導入などに今後さらに工夫すべき余地が残るものの、1955年出生コウホートと1965年出生コウホートの初婚行動に見られる大きな違いを説明する要素として賃金プロファイルの変化が重要であったことを示すことには成功している。

第 7 章「賃金・雇用制度と初婚行動」では、第 6 章で開発したマイクロシミュレーション・モデルを用いて、賃金・雇用制度の変化が初婚行動に与える影響について将来推計を行っている。そして、その将来推計結果に基づき、氏は賃金プロファイルをフラット化することが少結婚化対策になるという結論を導いている。氏は将来の労働需要に関してかなり大胆な仮定を置いた上でシミュレーションを実行しており、シミュレーションから得られた数値の大きさ自体にどの程度の信憑性があるか疑問なしとしないものの、初婚確率の傾向的な変化は乗り換えモデルで主張している内容とほぼ一致している。

第 8 章「賃金プロファイルのフラット化」では、第 2 章から第 7 章までの議論を総括し、賃金プロファイルのフラット化が高齢者の人的資本を活かす選択的引退制度にとっては必要条件であり、同時に少結婚化対策ともなりうるとしている。さらに、年齢階層ごとの賃金分散が変化した場合にどのような影響が少結婚化に生じるかについてマイクロシミュレーションを試みている。そして、若年層においては年功的な要素を残す一方、中高年層については能力給化を促進することが少結婚化対策と整合的であるという結論を導いている。

以上の諸章のうち第 2 章の結果は複数の国内学術専門誌に掲載され、また第 3 章から第 8 章の主要な結果は複数の国内研究集会や日本経済学会などでそれぞれすでに発表された。上述の各章は労働経済学・人口学の分野で多大な貢献を含むものと評価することができる。今後、いっそう緻密な理論化や表現上の推敲を要する部分も散見されるものの、学位請求論文は小川氏が既に独立した第一級の研究者として評価されうる水準の論文を書き上げていることを明白に示している。

したがって、われわれ審査員一同は小川浩氏の博士学位請求論文「高齢者雇用と少子化の関係について」が一橋大学博士学位（経済学）に十分値する内容を含んでいるものと判断する。

審査員

（外部審査員）

東京経済大学教授

小野 旭

（内部審査員）

大橋勇雄

高山憲之

武隈慎一

田近栄治